

■主要キーワード解説

■アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）

教員による一方向的な講義形式の授業とは異なり、生徒が主体的に多様な人々と協働しつつ行う能動的学習のこと。「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」（以下「審議まとめ」）ではそのねらいが、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点に整理された。

アクティブ・ラーニングは、そもそも大学の大量化、ユニバーサル化による教育の質保証の観点から注目された。初等中等教育においても、資質・能力の育成のため、授業改善の視点として次期学習指導要領に位置付けられることになった。（▶ p.022、070）

■資質・能力

グローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的進化等、将来の予測が困難な社会の中でも未来を切り開き、持続可能な社会を創り出していくために必要とされる力（「生きる力」）とはどのようなものを具体化したもの。「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の3つの柱からなる。資質・能力に着目した教育課程は、OECDのDeSeCoプロジェクトをはじめとして世界的な潮流となっている。国語科全体の育成をめざす資質・能力は、p.212 参照。

（▶ p.012、022、036、071）

■見方・考え方

「どのような視点で物事を捉え、どのように思考していくのか」という物事を捉える視点や思考の枠組みのこと。各教科の学習を通して身に付けられるこの「見方・考え方」は、社会生活の中で様々な物事を理解したり思考したりする際に重要な働きをするものでもあり、各教科の教育と社会をつなぐものといえる。（▶ p.012、031、074）

■カリキュラム・マネジメント

生徒や地域の実情を踏まえつつ、各学校が設定する教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づき、教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していく取り組みのこと。全ての学習の基礎となる力やこれからの社会のあり方を踏まえて求められる資質・能力が、教科等を越えて教育課程全体を通じて育成されるようにその役割が期待されている。「審議まとめ」においては、次の三つの側面から捉えなおされている。

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA（Plan [編成]-Do [実施]-Check [評価]-Action [改善]）サイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

（▶ p.029、039、078）

■高等学校基礎学力テスト（仮称）／大学入学希望者学力評価テスト（仮称）

高大接続改革の中で導入が検討されている新テスト。「高大接続システム改革会議『最終報告』」で示された概要は以下のとおり。

(▶ p.021、059、062、078)

	高等学校基礎学力テスト（仮称）	大学入学希望者学力評価テスト（仮称）
導入時期	・平成 31（2019）年度導入予定。 ※平成 35（2023）年度から次期学習指導要領に対応。	・平成 32（2020）年度導入予定。 ※平成 36（2024）年度から次期学習指導要領に対応予定。
目的	・高校段階における生徒の基礎学力の定着度を把握・提示できるようにする。	・大学教育を受けるために必要な能力について把握する。
対象者	・高校生の学校単位での受験を基本とするが、既卒業者等の受験も可能となるようにする。	・大学入学希望者
問題の内容	・基礎的な「知識・技能」を問う問題を中心とする。	・「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する。
対象教科・科目	・国語（国語総合）／数学（数学Ⅰ）／英語（コミュニケーション英語Ⅰ） ※次期学習指導要領が実施される段階で地理・歴史や公民、理科等を導入する。	・科目数はできるだけ簡素化する。 ※「最終報告」には、「地理歴史、公民」「数学、理科」「国語」「英語」への言及あり。また次期学習指導要領下では、「数理探究（仮）」や「情報」についても出題予定。
実施回数・時期	学年や時期、教科・科目等に関し、学校又は設置者において適切に判断できる仕組みとする。	・実施回数・時期については引き続き検討。 ※複数回実施の場合は IRT の導入も検討。 ・記述式・選択式の試験日を別々にすることも検討する。
解答方式	・選択式や記述式など多様な解答方式を導入する。 ・当初、記述式は短文記述を一部試行実施する。 ※次期学習指導要領の実施に合わせて一定数以内の文字を書く記述式の問題を導入する ・ CBT・IRT の導入を検討する。	・選択式と記述式。 ・記述式は短文の「条件付き記述式」とし、当面は国語、数学のみ実施。 ※次期学習指導要領下では、より文字数の多い問題を導入。 ・ CBT の試行に取り組む。 ※次期学習指導要領下から実施。

成績提供方法	<ul style="list-style-type: none"> ・複数段階で結果を提供する。 ・各学校や生徒等の順位は示さない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・選択式は、各科目の領域ごと、問ごとの解答状況も合わせて提供するなど現行より多くの情報を各大学に提供する。 ・記述式は評価結果を段階別表示。
---------------	---	---

■ CBT

Computer Based Testing の略。コンピューターを利用した試験の総称。「大学入学希望者学力評価テスト」「高等学校基礎学力テスト」においても導入が検討されている。(▶ p.059)

■ IRT

Item Response Theory（項目反応理論）の略称。この理論を用いることにより、テストを複数回受験する場合の難易度差による不公平を排除することが可能となる。二つの新テストの複数回実施の可能性とあわせて導入が検討されている。ただし導入のためには、事前に難易度推定のための予備調査や多量の問題のストックが必要とされ、また基本的に問題は非公開となり指導の工夫・充実に生かしくいことなどもあり、検証が引き続き行われている。

【参考資料】

教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」
高大接続システム改革会議「最終報告」